
僕のペットが擬人化したら。。。。

淡緑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のペットが擬人化したら。。。。

【Nコード】

N2298Z

【作者名】

淡緑

【あらすじ】

兎のうーちゃんを溺愛する少年^{など}那兎。

彼はある日、父親の書斎で偶然見つけた“擬人化”の本に書かれた事をうーちゃんにやってみると…

とある町に佇む一軒家に制服を着た少年が微笑みながら玄関の扉を開け入る。

少年は前髪で目が隠れており、傍から見れば少し近寄り難い雰囲気
を醸し出していた。

彼の名前は兎耳山那兎——町内のごく平凡な高校に通う高校2年生
の男の子で、異常な程ペットを溺愛している以外は何処にでもいそ
うな学生である。

那兎は靴を脱いできちんと揃えてから家にと、目の前に真っ
白な兎を抱いた少女が立っていた。

彼女は那兎の1歳年下の妹の兎羽——那兎と同じ高校に通う高校1
年生の女の子で、背中まで伸びた黒髪が似合う可憐な美少女である。
だが那兎はその姿——いや、正確に言うなら兎羽が兎を抱いている
姿を見た途端に不機嫌な顔を浮かべた。

「何勝手にモフモフしてるんだよ？うーちゃんを好きにモフって良いの
は僕だけだぞ！？」

「だってモフモフしてて温かいんだもん♪それにうーちゃんが『寂
しい、死にたい…』って言ってたから放つとく訳にもいけなかった
し。」

そう、兎耳山家には一匹の兎が飼われている。

名前はうーちゃん——那兎が偶然立ち寄ったペットショップで一目
惚れし、両親の反対を押し切って去年から飼い始めた。

兎耳山家にやって来た頃は家族に煙たがられていたうーちゃんも今
では毎日の様に家族で取り合う争奪戦が繰り広げられている。

因みに雌で名前の由来は兎のイントネーションを訛らせただけであ

る。

「はいはい、兎の声なんて聞こえる訳ないから。さ、うーちゃんをこっちに渡すんだ。」

「もーお兄ちゃんのケチー！」

「ケチで結構ですよ。僕はうーちゃんと一緒にいられれば誰に嫌われたって構わないし。」

半ば強引に兎羽からうーちゃんを奪還した那兎は階段を上り、自分の部屋へと引き籠った。

那兎がうーちゃんを抱き抱えたままベッドに寝転がると、次第にうーちゃんは彼の胸の中ですやすやと眠り初めてしまう。

流石に無理矢理起こしては可哀想だと思った那兎はゆっくりとうーちゃんを降ろしてベッドに寝かせる。

遊び相手がいなくなり暇を持て余し出した那兎は、退屈凌ぎに父親の書斎にある難しそうな本でも読み漁りに行く事にした。

彼は一週間程前から退屈になると時々父親の書斎にこっそり忍び込んで宝探し気分で色々物色している。

と、言うのも二週間前に彼の父親が転勤で旅立ち長期の不在となったお陰で書斎に容易に忍び込めるようになったからである。

書斎の本棚には図鑑や英文で書かれた本等様々な物があり、那兎はその中から適当に一冊取って開いてみるがページに専門的用語ばかりが羅列された本だったので読むのを諦める。

ふと彼が本棚の下に目をやると、明らかに他の本とは違う随分と古ぼけた真黒な本を見つける。

彼はその本を手に取り手で埃を払うと題名に擬人化の本と書かれ鎖で縛られて開けない仕組みになっていた。

> i 3 6 7 3 0 — 4 3 7 1 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2298z/>

僕のペットが擬人化したら。。。。

2011年12月8日07時51分発行